2024.05.09.　木曜礼拝「レビ記にある宝物　大祭司」レビ８章１節から１２節
Mac 牧師

一緒に祈りましょう。主よ、心から感謝します。私たちの人生に語りかけてくださる御言葉をありがとうございます。主よ、私たちがここに集うとき、あらゆる機会が与えられ、あなたのご忠実なお働きに感謝します。JD 牧師、マック牧師、レイトゥ牧師があなたの御言葉を宣べ伝えます。主よ、敵は、それがなされるのを好みません。ですから主よ、私たちはお願いします。どうか彼らをお守りください。彼らの上に御手を置いて、彼らに御力を与えてください。主よ、彼らが忠実にあなたに仕えるとき、あなたが彼らにさせようとなさることを敵に邪魔させないようお守りください。今晩の御言葉に祝福ください。どうか私たちに理解をお与えください。私たちはあなたに感謝し、あなたを賛美し、あなたにすべてのご栄光を捧げます。これらのことを唯一の御名によってイエスの御名によってお願いします。アーメン。

主を褒め称えます。ありがとうございます。どうぞご着席ください。こんばんは。私の愛する人々よ。今週はそういう週です。J.D.ファラグ牧師に代わって、 カルバリー・カネオへにようこそ。地元で来られた方がいらっしゃいましたら、会衆の一員となってくださりありがとうございます。私たちは、あなたが愛と交わりで、祝福されることを祈ります。オンラインでご参加の皆さん、木曜日夜のライブ配信礼拝へようこそ。いつもは、JD 牧師が「ダニエル書」を一行ずつ教えていますが、彼が不在の間は、先週から始めたこのシリーズを続けます。お知らせです。祈り会を行ったばかりですが、次回は、6 月 4 日の午後 7 時から、この礼拝堂（聖域）で行います。可能であれば、いらしてください。一緒に共同体として、 私たちが祈るべきだと知っている事柄のため祈りましょう。たとえそれができなくても、クローゼットに入って祈ることを忘れないでください。主と二人きりの時間を過ごし、必要な祈りを捧げてください。では始める前に、一緒に祈りましょう。今夜のこの学びへ主に祝福をお願いしましょう。

天のお父様、私たちの人生で、私たちの人生を通して、あなたが続けてくださるすべてに感謝します。私たちはあなたを愛しています。あなたの御力と強さによって、私たちにここで出会ってくださり、そして、この学びが私たちを励まし、教え、私たちの心に置き、今晩あなたが与えてくださる教えを私たちが実践できるようにしてください。ですから、私たちに聞く耳と、あなたの召しに従う心を与えてください。私たちはあなたを愛し、あなたを心から賛美します。救世主イエス、イェシュアの力強い御名によって祈ります。アーメン。OK！

さて、今夜は「レビ記」シリーズのセッション２をします。今夜、私たちが扱う『レビ記の宝物』は、おもに祭司職の大祭司と祭司の側面の学びです。そして、メルキゼデクについての短い考察で締めくくります。「レビ記」アロンの祭司職の確立に関する章は、8 章から 10 章です。しかし、聖典全体を通して、これらの書の中に含まれている宝物は、なんということ。この聖句を読みながら、私たちは行ったり来たりすることになります。先週も話したように、すべてを網羅するのは不可能です。実際、私たちは聖書が無尽蔵であることを知っています。一節のために一生を費やすことができます。それだけ神の御言葉は深いのです。しかし、私たちが学んだことを、この書と聖書全体を受け入れる動機付けとして使えればと思います。すべてがイエス・キリストという人物を指し示していることを理解し、私たちの歩みを強めるために側面を活用する。先週、この書についてのイントロはしたので、さっそく本題に入ります。でも、私たちがこれから証ししようとしていること、それは祭司の聖別であることについて、簡単な説明が必要です。「出エジプト記 28 章」には、祭司の衣服にまつわる詳細が書かれていて、それを少し見ていき、それから２９章で、主は、モーセに、アロンとその息子たちをどのように聖別されるかを命じられます。それから「出エジプト記」に戻って、幕屋、いけにえ、祭司について見ます。 その見ていく詳細は、ほとんどが「レビ記」にはないものが含まれています。その理由は、「出エジプト記」をすでに読み、その多くを理解しているという前提だからです。皆さん、分かりますか？　だから、このような理由やその他の理由を考えると、聖典に目を通すことに価値を見出せるはずです。神の御言葉は、しばしばそれ自体の上に築かれます。私たちは、それがあらゆる点で神によって構築されたものだと知っています。ですから、忘れてはならないポイントは、聖書の側面を学ぶときに聖書を通読することです。非常に重要です。これに加えて、幕屋の構造をよりよく理解できます。類型が深くなればなるほど、いろいろな意味で特に大祭司の立場が含まれるようになります。では、大祭司とは何か？　よくぞ聞いてくれました。なぜなら、私たちには神の御言葉に従った答えがあるからです。今、私たちの多くには短い答えがあって、しかし、私は「ヘブル人への手紙」5 章 1 節から 4 節に、そ

の完全な定義が記されていると思います。神の御言葉は語ります。

ーヘブル　５：１ー

大祭司はみな、人々の中から選ばれ、人々のために神に仕えるように、・・・

皆さん分かりましたか？

・・・すなわち、ささげ物といけにえを罪のために献げるように、任命されています。

ーヘブル　５：２ー

大祭司は自分自身も弱さを身にまとっているので、無知で迷っている人々に優しく接することができます。

ーヘブル　５：３ー

また、その弱さのゆえに、民のためだけでなく、自分のためにも、罪のゆえにささげ物を献げなければなりません。

ーヘブル　５：４ー

また、この栄誉は自分で得るのではなく、アロンがそうであったように、神に召されて受けるのです。

ここまで皆さん大丈夫ですか？　これが、大祭司は人と神との仲介者だというシンプルで短い答えで定義です。祭司は、私たちに代わって執り成しをする代理人です。しかし、留意ください。祭司は、神によって召されねばならなかった。これは私たちが心に留めておくべき重要な詳細です。また、祭司は、自分自身の罪も贖わねばならなかったことも覚えておくべきです。たった一人の大祭司が、決してしてはいけないこと。さて、先ほど述べた 幕屋についての理解が深まれば深まるほど、類型論はさらに深まります。その基本的な図がこれです。赤でマークしているのは、真鍮の水盤です。先週は全焼の献げ物が祭壇の上で焼き尽くされることについて話しました。そして、このことを私たち自身にどのように関連づけることができるかを、生きるいけにえとして自らを捧げ、主の御前で自らの自由意志によって焼き尽くされるかを話しました。今や、私たちが理解したいのは、この奉献のプロセスの側面を、私たちの主へのアプローチにも関連づけることができるということ。ですから、留意ください。真鍮の水盤を。祈りにおいて、またあとでそれに戻り、点と点を結びます。これから「レビ記」8 章だけにある幾つかの節に入ります。聖典をくまなく探求すると、その理由はわかります。まず、「レビ記」8 章の最初の 2 節から始めます。神の御言葉をお読みします。

ーレビ　８：１ー

主はモーセにこう告げられた。

ーレビ　８：２ー

「アロンと、彼とともにいるその子らを連れ、装束、注ぎの油、罪のきよめのささげ物の雄牛、二匹の雄羊、種なしパンのかごを取り、

まず、1 節のこの神からの直接的語りかけを思い出すべきです。「神がモーセに告げられた。」神が、モーセに提案として語られるのではありません。神が告げられるすべては、詳細に語られ、全く差異はありません。これは重要な点です。実際なぜ神権が、アロンとその息子たちに絞られたのか、その理由の一端がここにあります。それ以前は、イスラエルの民全体が神から祭司として召されていたように見えるからです。「出エジプト記」19 章 5 節と 6 節にこう書かれています。神の御言葉をお読みします。

ー出エジプト　１９：５ー

今、もしあなたがたが確かにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはあらゆる民族の中にあって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから。

ー出エジプト　１９：６ー

あなたがたは、わたしにとって祭司の王国、聖なる国民となる。』これが、イスラエルの子らにあなたが語るべきことばである。」

これがわかりますか？　ですから、これはまさに、モーセが行ったことです。モーセが下って行き、神が告げられたことを民に語った時、民は皆、モーセに同意しました。神の命令に関して、誰もが同意しました。ですから、彼らは祭司の王国となるはずでした。私たちは、すでに神がイスラエルの民を祭司と見なされたのを知っています。24 節でそれがわかります。今、アロンとその息子たちは、祭司職という特別な職に召されました。しかし、全国民が祭司でした。でも、神がモーセに語られたことに同意した後、すべての雷鳴を聞き、神の山からの稲妻を見た後、主の力強い御手によってエジプトの地から解放されたことは言うまでもなく、彼らはどうやって神に報いますか？　金の子牛を崇拝することででした。覚えていますか？　その指導者は誰でしたか？　アロンです。この反逆行為によって、国は祭司の王国であることを剥奪されました。しかし、神は祭司として仕えるのに十分な資格を持つ１部族を用意されました。他の人たちのように、私がレビ族が選ばれたと信じるのは、モーセからの神の御言葉に彼らが応え行ったことからです。モーセがシナイ山から下りてきて、すべての反逆行為を把握したからです。モーセは話をしました。32 章 26 節、27 節でこのことがわかります。神の御言葉をお読みします。

ー出エジプト　３２：２６ー

そこでモーセは宿営の入り口に立って、「だれでも主につく者は（←これ分かりますか？）私のところに来なさい」と言った。すると、レビ族がみな彼のところに集まった。

ー出エジプト　３２：２７ー

そこで、モーセは彼らに言った。「イスラエルの神、主はこう言われる。各自腰に剣を帯びよ。宿営の中を入り口から入り口へ行き巡り、各自、自分の兄弟、自分の友、自分の隣人を殺せ。」

そして、彼らはそうしました。レビ族は、戦士たちでした。彼らがそうしたのを信じられません。モーセとアロンは、レビ族の子孫だったから？　違います。彼らが、神/ヤハウェに献身していたからだと私は信じます。しかし、再度この（金の）子牛の崇拝の指導者が誰であったかを忘れないでください。アロンでした。彼が、金の子牛を作らせました。しかし、神は！　そんなことがあっても尚、アロンを用いて大祭司として仕えさせようとされました。それについて考えてみてください。神のなさる御方法は、まさに神聖です。私たちは決してそれをしませんね。でしょ？　失格！　ー（笑）ー　しかし、神は、、、、違います。2 節に祭司への聖別の物が記されています。「装束、注ぎの油、罪のきよめのささげ物の雄牛、二匹の雄羊、種なしパン」（レビ　８：２参照）

これは特別な儀式です。大祭司に関して、具体的に見てみましょう。まず 1 つ目は、装束です。「出エジプト記」に戻り、８章に詳しく書かれています。しかし、私たちが考えるべきことは、アロンの息子たちの装束について 4 つの託宣があります。しかし、大祭司には 8 つの託宣があります。「8」は、新しい始まりを意味する数です。これは、アロンの祭司職となること、祭司職の新しい始まりになりました。大祭司に独特の４つの託宣は、胸当て、エポデ、長服、かぶり物でした。大祭司がかぶる金のかぶり物には、「主の聖なるもの」（出エジプト　２８：３６参照）が刻まれていました。アロンの後に任命された大祭司は皆、アロンの血統でなければなりませんでした。聞いてますか？　繰り返しますが、アロンはレビ族出身でした。アロンの大祭司の装束は特別な理由のために設計されました。これは非常に重要です。「出エジプト記」28 章 2 節に、これが記述されています。神の御言葉をお読みします。

ー出エジプト　２８：２ー

また、あなたの兄弟アロンのために、栄光と美を表す聖なる装束を作れ。

なぜか?「栄光と美を表す」ために。これがわかりますか？　この「栄光と美」は、大祭司になるためではありません。全く違います。それは実際に、装束の覆いの栄光を、それを着ている人の上に覆い被せるためでした。それがポイントでした。理由はこうです。

「肉なる者がだれも神の御前で誇ることがないようにするためです。」（I コリント　１：２９）

それを着る者は、 その唯一の目的は主に仕えることでした。そうすることで、大祭司はすべての輝きによって主に栄光を帰しました。つまり、神が設計されたことを忘れてはなりません。大祭司が装束を着たとき、

それは私たちの大祭司イエスの栄光のすべてを現し、また実際にその伏線でした。実際、聖書にはこう書かれています。

「私たちはこの方の栄光を見た。」（ヨハネ　１：１４参照）

これは、実際、大祭司の聖服の１つの型でした。周辺諸国の王たちが着ていたものを圧倒しました。 実際、大祭司は王や王族として崇められていました。この装束の構造のために。これらの装束は完璧でした。 そうあるべきです。再度、王であり祭司であられるキリストを指し示すからです。大祭司の装束を調べることはそれ自体が学びです。しかし、大祭司の装束の中で最も重要な部分と考えられるエポデについて見たいのです。これは単なる表現に過ぎません。 原型は、私たちには分かりません。しかし、それは金、青、紫、緋、上質の麻：異なった 5 色でできていました。このすべてにある詳細は偶然の一致ではありません。私たちの神が命令されるからです。私たちは皆、これを異なる方法で見れますけど、同じ原理を導き出すことができます。エポデに関連して、これに使われる金は、叩いて薄くし、短冊状に切られ使われました。そして、金は王権を表し、東方から来た賢者たちがイエスに捧げたささげ物の１つです。覚えていますか？　私たちの王の王は鞭打たれ、たくさん切り裂かれました。青は神性を表すと言われます。私たちの大祭司は、完全に神で、完全に人であられることを私たちは知っています。紫色は、映画(「カラーパープル」)ではなく、多くの皆さんがご存知、王族を象徴します。イエスは神性な王族であるだけではなく、預言者たちが預言したように、イエスは、ダビデ王の王家の血筋です。「血」に関して言えば、 緋色を縫い込みます。すべての血の中で流されるのは、神のご性質を持つ王の血だけが、王家の血統を通して神の創造物と契約を結び、完全に純粋であられるにも関わらず、イエスの血潮が流され、これが上質の麻に象徴されます。これもエポデに織り込まれました。これが大祭司の装束でした。私が言ったように、この 1 つひとつを学べば、その象徴と類型にすっかり魅了されます。先に進むと、ささげ物の雄羊の血に含まれる注ぎの油がどのように展開されるか分かります。5 節まで読み、要点をお話しします。「レビ記」8 章 3 節から 5 節まで、神の御言葉をお読みします。

ーレビ　８：３ー

全会衆を会見の天幕の入り口に集めよ。」

ーレビ　８：４ー

モーセは主が命じられたとおりにした。会衆は会見の天幕の入り口に集まった。

ーレビ　８：５ー

モーセは会衆に言った。「これは、主が行うように命じられたことである。」

「命じられた」という言葉がこの３章の中で、20 回以上出てきます。これらは命令です。先ほど話しましたが、神はアロンを大祭司として用いられました。 金の子牛の大失態の後でさえ。神は、彼らを公に召されました。長老たちがそこにいることを確認しました。彼らがそれを見ることができるように。これは重要です。なぜなら、長老たちが投票できたとしたら、、、、違う結果になったかもしれません。アロンがこの長老たちの会衆の前に公に召されたとしても、多くの会衆が反対するから。忘れてはならないのは、後にモーセとアロンは試されます。しかし、これは神の命令でした。神が最終決定権を持たれます。これは、こんにちの私たちでもあります。神は、ご自分が召された者を召される。モーセが、兄（アロン）を召したのではありません。イスラエルの民が、アロンを召したのではありません。神が召されました。そして、神はそれを確認するため、モーセという神の人を選ばれました。アロンはその直後に試されました。2 人の息子の死です。それでも神はアロンに寛大であられました。その記述に戻って読み返すと、アロンはまだ物事を正しく行えていませんでした。しかし、神は慈悲深くあられました。アロンは、愚かな過ちを犯したけれども、 神はアロンを力強く用いられました。皆さん、どうですか？　それは私たちのための御言葉です。皆さんの多くは奉仕し、謙虚です。落ち込まないでください。神のご用意の時にせねばなりません。神に助けは必要ありません。神が違うと仰るまで、神によって用いられ続けます。

「神の賜物と召命は、取り消されることがないからです。」（ローマ１１：２９）

神は慈悲深い神であられます。彼らは完璧ではありませんでした。私たちの誰もがそうです。 私たちは誰も完璧ではありません。さて、「レビ記」8 章 6 節を読むと、彼らが神の奉仕のために聖別される最初の出来事がわかります。神の御言葉をお読みします。

ーレビ　８：６ー

モーセはアロンとその子らを近づかせ、彼らを水で洗った。

分かりますか？　これが最初の一歩でした。清めです。神のための奉仕が実際始まる前に、洗わなければならなかった。これをある種のバプテスマを受けた象徴と同一視する人もいます。それが示唆するのは、イエスがバプテスマを受けられた時、その意味の一部は、イエスが私たちの大祭司であられることによって、御父への魂の献身的な奉仕を始める前に、この洗い清めを受けられることでした。再び、これは唯一の目的ではないけれど、そのことから何かを取り去ることではなく、結びつけることができます。幕屋の庭の配置を見返すと、この真鍮の水盤は、彼らが洗われた場所と最も結びつけられます。留意ください。アロンとその息子たちは、入り口門、扉から入り、洗うために水のあるところに連れて行かれます。先週、イエスが扉であり、イエスが、”その道”であるという話をしました。今、彼らは”その真理”：神の御言葉を象徴する水のところにいます。私たちはこの祭司職が確立される時これの向かう先が分かります。幕屋の内側は、最も神聖な場所です。そこが、”そのいのち”だからです。ここは祭司と大祭司が入れる場所でした。大祭司だけが、至聖所に入ることができました。それは年に一度だけでした。 贖罪の日です。祭司は、血の犠牲を払わなければ、入ることができませんでした。また、注目すべきは、大祭司と祭司は、すべての務めを裸足で行っていたことです。それは理にかないます。彼らは聖なる地にいたのだから。（出エジプト　３：５参照）

神のご臨在、 神聖な場所に。尊重すべきです。それが神が命じられたことです。神は神聖であられます。いと高き神の祭司になることは厳粛な務めです。サウルが祭司をしようとしてどうなったか考えてみてください。その記述を覚えていますか？　ここで、サウルはサムエルが主の御前にささげ物をするのを待っています。サムエルは、その時間に戻ってくると言いました。時間がかかり過ぎます。今や民は散り散りになり、サウルは焦ります。そこでサウルは、自分に、全焼のささげ物を持って来るように言い、自分に、平和のささげ物を持って来るように言い、「私が何とかする。」サウルが用意します。サウルが準備している時、サムエルが来ます。サムエルはサウルのそばに来て、こう言います。

「あなたは愚かなことをした。」（I サムエル　１３：１３参照）

これは厳粛な務めです。実際、それを続ければ、 アガグ王と同じ。女も子供も家畜もみんな殺せと言われました。全部です。全て。サムエルがそこに来て、辺りを見回します。 その王はまだ生きています。彼らはすべてを略奪しました。家畜の中から最良のものを選びました。しかし、それだけではありません。彼らは完全に解体され殺されるはずのつまらない家畜を、神に捧げたのです。（I サムエル　１５：９参照）

おぉ、祭司たちも無実ではありませんでした。ですからサムエルはアガグを切り刻みました。（I サムエル　１５：３３参照）

そして、サウルとの関係を断ち切ります。サムエルは 10 マイル離れたラマに行き、 死ぬまで、決してサウルに会うことはなかった。それがいかに深刻かです。「サムエル記」です。再び、祭司であることは厳粛な務めで、私たち教会は皆、祭司として召されています。ですから、自問してみましょう。私たちは祭司職に対してどれほど真剣か？　ですから、私たちの歩みを強化するために心に留めておかねばならない側面があります。私たちも最も神聖な場所に入るよう招かれているのを認識すべきです。 私たちの大祭司イエス・キリストの血によって。「ヘブル人への手紙 10 章」に記されています。19 節から 22 節、神の御言葉は語られます。

ーヘブル　１０：１９ー

こういうわけで、兄弟たち。私たちはイエスの血によって大胆に聖所に入ることができます。

ーヘブル　１０：２０ー

イエスはご自分の肉体という垂れ幕を通して、私たちのために、この新しい生ける道を開いてくださいました。

ーヘブル　１０：２１ー

また私たちには、神の家を治める、この偉大な祭司がおられるのですから、

ーヘブル　１０：２２ー

心に血が振りかけられて、邪悪な良心をきよめられ、からだをきよい水で洗われ、全き信仰をもって真心から神に近づこうではありませんか。

彼らが、きよい水で洗われたように、私たちの霊的な体は、御言葉の水で洗われる必要があります。これは当時は一部の人々に行われたとはいえ、祭司の概念はもとからありました。考えてみましょう。事実、祭司の職務はアダム以来、すでに行われていました。 それらは代々受け継がれて来ました。先週もこれについて少し話しました。だが、何が起こったのか？　不敬虔になりました。そして時を経て、バベルの塔で冒涜の極みに達したのだと思います。塔の見取り図や、どデカいものをどうやって建てたかなどは、必ずしも要点ではありません。彼らは天へ届きたかった。何をもって？ 何であれ、彼らが捧げる生贄によって。この違いが分かります？　だから自ら身を切ったり、いろんな儀式をするのです。事実、あらゆる偽宗教はバベルまで遡ることができます。すべて。主は命じられ、世はそれを冒涜した。彼らはその邪悪な愚かさにおいて、カインをはるかに超えていました。しかし、神は、神の憐みにおいて、邪悪な人間たちは、どの種の聖なる制度も維持できないのをご存じのゆえ、ましてや、動物の血は永久に罪を取り除くのには十分ではなく、イエス・キリストの血によって、すべての人に驚くべき祭司の地位を与えてくださいました。自ら大祭司であられるお方によって。さて、彼らの聖別への第一歩であった、祭司が洗われる話に戻ります。そして今、アロンが完全に装束に身を包んだ後、「レビ記 8 章」10 節から 12 節までの箇所を読むので、特に 12 節に注目してください。御言葉は語られます。

ーレビ　８：１０ー

それから、モーセは注ぎの油を取って、幕屋とその中にあるすべてのものに油注ぎを行った。こうしてそれらを聖別した。

ーレビ　８：１１ー

さらに、それを祭壇の上に七度振りまき、祭壇とそのすべての用具、また洗盤とその台の油注ぎを行い、それらを聖別した。

ーレビ　８：１２ー

また、注ぎの油をアロンの頭に注いだ。こうして彼に油注ぎを行い、彼を聖別した。

この時、アロンだけが、大祭司として油を注がれます。これは私たちが忘れてならない鍵です。お分かりのように、彼はまず洗われ、今度は油を注がれました。思えば、油注ぎの油は、聖霊の象徴です。そして、この大祭司の聖別過程で、あるパターンが展開し始めるのが分かります。イエスは私たちの大祭司だから、イエスが水の洗礼を受けた後、何が起きました？　聖霊がイエスの上に降臨されました。私はそれが偶然だとは思いません。聖典の細部に至るまで、すべてがキリストを指し示しているからです。そして、「レビ記 8 章」14 節から 15 節に目を移すと、すべての人は衣服をまとっています。神の御言葉は語られます。

ーレビ　８：１４ー

それから彼は罪のきよめのささげ物の雄牛を近寄らせた。そこで、アロンとその子らは、その罪のきよめのささげ物である雄牛の頭に手を置いた。

ーレビ　８：１５ー

それが（モーセによって）屠られると、・・・

よし。読み続けると、モーセが、全焼のささげ物の雄羊と任職ための雄羊を含め、捧げる職務をどのように行ったかがわかります。ここでのポイントは、いくつかのことを示します。繰り返しますが、まず 1 つ目、アロンの祭司職が確立されていないにもかかわらず、これらの祭司職が行われていること。これが分かります？　そして、神の御言葉はこのことを明らかにしています。その一例が「詩篇 99 篇」6 節、神の御言葉が語ります。聞いてください。

ー詩篇　９９：６ー

モーセとアロンは主の祭司たちの中にサムエルは御名を呼ぶ者たちの中にいた。彼らは主を呼び主は彼らに答えられた。

モーセとアロン。それは明らかに意味をなします。モーセが祭司、ある意味大祭司と呼ばれていること、というのは、先ほど話したとおりだからで、大祭司は民に代わって神に執り成し、主に直接つながることができます。モーセがそうであったように。そして、もし専門的なことを言うのであれば、これに加えることができる、律法以前の人々も見つけられます。次に考えてほしいことは、 モーセが任職ための雄羊のいけにえを続け、このいけにえから、血が祭司に塗られること。しかしそれは大祭司に関わる象徴で、キリストの類型が現され続けるところです。なので、覚えておきましょう。大祭司アロンが洗われ＝洗礼を受けた後、聖霊の型である油を注がれ、それから、血が塗られました。これがどこに向うのか分かります？　これは、私たちの大祭司であるイエス・キリストについて言えば、完璧です。覚えていますか？　イエスはまず洗礼をお受けになり、それから聖霊が注がれました。その後、イエスご自身の血が塗られ、 ご自分を大祭司として聖別なされました。そのつながりがお分かりですか？なぜなら、イエスの血が塗られたとき、罪を贖うためのどんな血も塗られる必要がなくなったからです。そして、皆さんの多くがご存じである、「ヘブル人への手紙 10 章」はこの点をよく表しています。事実、「ヘブル書」の大部分は「レビ記」を背景としています。これらすべてを結びつけるために。大祭司の職位を示すために。イエスにふさわしいところ。そのすべてにおいて、ちょうど聖書の巻がキリストを指し示すことが意図されたように。イエスは私たちの大祭司で、そして、神は私たちにこれを知ってほしいと願っておられます。聖典の中で、祭司という言葉が最初に出てくる所のゆえに、こう言います。それは律法が定められるずっと前からで、私たちはそれを知っています。それはどこにあるのか？　ええ、神はまず、メルキゼデクとして知られる者に祭司の称号をお与えになりました。「創世記 14 章 18 節」にこれがあります。神の御言葉は語られます。

ー創世記　１４：１８ー

また、サレムの王メルキゼデクは、パンとぶどう酒を持って来た。彼はいと高き神の祭司であった。

理由があり、それが見つかるまず第一の箇所です。私たちがよく見るために。これに注目してください。メルキゼデクは単なる祭司ではなく、いと高き神の祭司であった。私達は、アブラムとして知られていた当時のアブラハムが、この祭司によって祝福されることを知っています。そして、アブラハムは祭司に戦利品の 10 分の 1 を与えます。彼はメルキゼデクに什分の一を捧げたのです。そして、これは大事な詳細です。メルキゼデクとは、「義の王」という意味だとヘブル人の手紙から学びます。彼はサレムの王でもあり、それは「平和の王」を意味します。つまり、彼は王であり、祭司です。すべての祭司について、先ほど学んだことに戻ります。神の祭司は皆、神に召されなければなりませんでした。皆さん、ついてきてます？　皆、神によって召されなければならなかったのです。大祭司の奉仕は、特別に主に捧げられました。大祭司が行うすべてのことにおいて。さて、このメルキゼデクを聖霊として描いた見解を持つ人々は多いです。ベツレヘム以前のキリストの顕現と結びつけようとする人たちもいます。そして、他の多くの人たちも、これをいろいろなものに結びつけます。でも、そうする必要があるとはまったく思えず、その理由があるとは思えません。聖典はメルキゼデクの祭司職について明確だからです。彼が祭司職にあることを明かすことが、最大のポイントなのです。そして、アロンの祭司職がイエスを指し示しているにもかかわらず、イエスは私たちをメルキゼデクに引き戻してくださるのです。これがわかります？　そして、私たちはよく言いますが、イエスが聖句を引用しているときは、私たちは過去にさかのぼり、事柄を調べるのが良いのです。これから見るこの記述でイエスはパリサイ人たちに訴えておられます。ダビデがなぜ自分の子孫を「主」と呼べるのかと、彼らに尋ねておられます。「マタイの福音書」22 章 41 節から 44 節に、このことが記されています。神の御言葉は語られます。

ーマタイ　２２：４１ー

パリサイ人たちが集まっていたとき、イエスは彼らにお尋ねになった。

ーマタイ　２２：４２ー

「あなたがたはキリストについてどう思いますか。彼はだれの子ですか。」 彼らはイエスに言った。「ダビデの子です。」

ーマタイ　２２：４３ー

イエスは彼らに言われた。「それでは、どうしてダビデは御霊によってキリストを主と呼び、

ーマタイ　２２：４４ー

『主は、私の主に言われた。「あなたは、わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで」』と言っているのですか。

で、彼らは、イエスに答えることができませんでした。そして聖句によれば、彼らはそれ以上イエスに質問しませんでした。彼らはただやめてしまった。しかし、彼らが、イエスが引用していた聖句に目を戻したかどうかを知るのは、じつに面白いことです。それが私たちが、やろうとしていることだからです。そして、もし彼らがそこに戻っていれば彼らの注意を引くはずの、さらなる何かを私達は見つけるでしょう。「詩篇 110 篇 1 節」に記されています。次に 4 節まで飛ばし、その要点を指摘します。神の御言葉は仰せられます。

ー詩篇　１１０：１ー

主は　私の主に言われた。「あなたは　わたしの右の座に着いていなさい。わたしがあなたの敵をあなたの足台とするまで。」

4 節まで飛ばし、お読みします。

ー詩篇　１１０：４ー

主は誓われた。思い直されることはない。「あなたはメルキゼデクの例に倣いとこしえに祭司である。」

もし彼らが戻って、4 節をよんでいれば... 私たちには節があるけど、彼らにはないんだった。もし彼らが 2 分間、2 分間読んだなら、これを見たでしょう。ついてきてます？　アロン系祭司はレビ族の系統です。イエスはユダ族の出身です。そして、彼は永遠に祭司と呼ばれます。アロンの秩序ではなく、メルキゼデクの秩序に従ってです。そこで私たちが自らに問うべきは、その秩序とは何か？　そして、神の御言葉がその答えをくださるのかを見てみましょう。神をたたえます。神は、この秩序に関して答えをくださいます。そして、これを読みながら、私たちがここで指摘されていることを理解できるように祈ります。早口なのはわかってるから、ゆっくり話すようにします。「ヘブル人への手紙 7 章」、ひとつの節、3 節を読んでみましょうこれが答えです。メルキゼデクについて話していることを念頭に置いて読んでください。これが今、取り上げていることです。いいですか。これを逃したくありません。では、いきます。神の御言葉は仰せられます。メルキゼデクは、、、考えてみてください。

ーヘブル　７：３ー

父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっているのです。

秩序。これは、キリストが祭司職において従う秩序です。なぜか？　聞いてください。キリストに天の父がいないとは言っていません。それが私たちが話していることではありません。聞いてください。メルキゼデクは、「父もなく、母もなく、系図もなく、生涯の初めもなく、いのちの終わりもなく、神の子に似た者とされて、いつまでも祭司としてとどまっている。」要はこういうこと、メルキゼデクに関連するすべての家系は、神のご計画によって聖典に記されていません。皆さん、ついてきてます？「ヘブル人への手紙」の著者

は、このことを強調しています。聖典から省かれたことで、まさに神の御子が持つ永遠の容貌をメルキゼデクに与えています。わかります？　これが、イエスがメルキゼデクの位にならって永遠に大祭司であり続ける理由です。彼を縛る系図はなく、彼を縛る部族もなければ、彼に刻むタイムスタンプもまったくない。この祭司職の秩序では、それはできません。そして、新しい祭司職には新しい掟が伴います。「ヘブル人への手紙」にそのすべてが書かれています。アロンの祭司職はイエスを指し示していて、イエスはメルキゼデクを指し示して、彼が永遠の大祭司であることを知らせています。そして、その体制は一新されました。これが私たちが見るべきものです。モルモン教徒にとって、これは本当につらいことだと思います。彼らがアロン系祭司職の側面を誇示し、活用し続けるなかで。打ちのめされるに違いありません。彼らが目を覚まして真理を知ることを願います。そして、それは彼らのひとつの側面にすぎません。でも、大して調べずとも目立つ、大きなものです。祭司職にある聖なる応用を霊的に使うことは問題ではありません。文字通りの固執、神の教会はそうではありません。繰り返しますが、私たちの大祭司はイエスです。そして、私たちが見てきたすべての節は、それ自体が学びです。しかし、祈りは、私たちが皆、主の御言葉を求め続け、自分自身が良き小さな祭司であり続けるための何かを学ぶことです。カポノ、上がって来て下さい。 ご起立ください。祈りましょう。

おぉ、天の父よ。主よ、ありがとうございます。私たちは、あなたの宝物のすべてが大好きです。そして、私たちのところへこれからも宝を届けてくださるようお願いします。そうすれば、あなたとの愛がもっと深まるでしょう、主よ。あなたの御言葉は真理です。そして、私たちがあなたの務めに従事し、善き祭司として秩序正しく行動できますように。あなたが私たちに召されたことの良き証人となるために。そして、私たちがその職務に忠実であることが見出されますように。主よ、あなたを愛しています、本当にありがとうございます。イエス・キリストの力強い御名において祈ります。 アーメン。

メッセージ by JD Farag 牧師　カルバリー・カネオへ

http://www.calvarychapelkaneohe.com/

Calvary Chapel Kaneohe47-525Kamehameha Hwy. Kaneohe, Hawaii　　筆記 hukuinn7